

〔翻
刻〕

筑波大学附属図書館所蔵 西村本『間之本』（B冊 その一）

飯 塚 恵理人

「楳山国文学」第十八号にはA冊を翻刻した。本年度よりB冊の翻刻を行う。この十九号は、「廿 黒塚」までとする。

〔B冊目録〕

一 松山 二 調伏曾我 三 小袖曾我 四 ・放下僧 五 ・吉野閑 六 ・国栖 七 守矢 八 ・籠太鼓 九
蟬丸 十 ・富士太鼓 十一 ・善知鳥 十二 ・百萬 十三 ・自然居士 十四 東岸居士 十五 ・花月 十六
春榮 十七 ・舟弁慶 十八 ・山姥 十九 ・西行櫻 廿 ・黒塚 廿一 ・藤榮 廿二 ・三井寺 廿三 ・安
宅 廿四 ・芦刈 廿五 感陽宮 廿六 ・唐舟 廿七 鳥追舟 廿八 俊寛 廿九 ・横山 卅 小原御幸 卅一
関原与市 卅二 六代 卅三 木賊 卅四 木曾願書 卅五 隠岐院 卅六 羊 卅七 俊成忠則 卅八 弱法師
卅九 護父王 四十 行家 四十一 長兵衛 四拾二 【村山】 四十三 ・二人閑 四十四 ・土車 四十五 班
女 四十六 ・小督替 四十七 ・愛染川 四十八 竹雪 四十九 雲雀山 五十 祝言 五十一 縄鈴木 五十二

春近 五十三 ・ 天鼓 五十四 ・ 藤戸 五十五 ・ 葵上 五十六 ・ 邯鄲 五十七 現在熊坂 五十八 ・ 富士山
 五十九 葛城天狗 六十 玄上 六十一 ・ 春日龍神猿 六十二 ・ 鷄立田 六十三 ・ 盛久 六十四 望月 六十
 五 ・ 道成寺今春 六十六 ・ 七騎落 六十七 丹後物狂 六十八 【岩井】同 六十九 大杜 七十 道成寺上
 七十一 禪師曾我 七十二 那須 七十三 ・ 源氏供養 七十四 ・ 高砂ナガキ 七十五 ・ 簾替 七十六 ・ 藤戸替
 七十七 町積春日龍神 七十八 ・ 岩舟 今春ハ本社ありト書テ、聞なし 七十九 ・ 養老居間 八十 ・ 御裳下 曜 八十一 ・ 右近 八十二
 諸社 八十三 熱田 八十四 魔無原 八十五 ・ 雨月 八十六 錦戸 八十七 大江山 八十八 元服曾我

〔本文〕

松山 一

らんしやうへかやうに候者ハ、讃岐国しろミね相模坊にしよくする木葉天狗にて候、扱も仁王七十五代しゆとくめん
 と申奉るハ、鳥羽第一の王子なり、御弟近衛院に御位を譲り、新院と申奉ル、然ば近衛院程なく崩御の後新院第一の
 てう人親王を御位になし奉らんとおほし召處にびぶく門院の御はからひにて、鳥羽第四の王子、本院と申を御位にな
 し給ふ、後白川の院是なり、此遺趣^{いんそ}によつて、新院本院御兄弟の御中ふわに成、新院御謀叛有へしとて、宇治の左大
 臣あくさふをたのミ給ふ、武家方には、六条の判官為義父子に武者大将とさため給ふ、本院の御みかたにハ、関白内
 大臣源の義朝・平清盛大将として、保元元年十一月十一日とらの刻より宮軍始り、同たつの刻に合戦やぶれ新院打ま
 け給ふにより、八月十日に当国へ下着あり、なをしまといふ所に御はいしよを作り、四方についちをつかせ、口壺つ
 あけ日に三度のぐごをそなへ申ならてハ^間とう人なし。寔ハひなの御住居浅間敷、秋もやうやくふけ行まゝに、松をは
 らふ嵐の声、草村もよハる虫のこゑ、おもへハきのふの夢のごとし、さもいにしへハ樂にはこりきよくろう金殿百官
 けいしやうに^{かし}いつかれ、或ハ近国の花をもてあそび、なんらうの月にうそふきすてに三十八年を送しに、いか成前

世のしゆくがうに、かゝるなげきにしづまんや、その時の歌に △はまちとり、跡ハ都にかへれ共、身ハ松山に音をのミぞなく 偏に後世の御ためにとて、こぶの大乗経をあそハし、かねのおともきこへさらん所におさむるも不便なり、主城近八幡山にこめたくおほしめし、平治元年の春の比仁和寺へ御のほせ候へハ、主上此よしきこし召、御手跡だに御ゆるしなく、終に御返し候へハ、しんいのほむらきわもなし、わが怨念さんげのため此経をかきつるに、いかて此念をさんぜんと、げきりんのあまりに、魔道にしかうしてましんとなり遺恨をはらさんと、かきの御衣にすゝかけ長ときんをめされ、大乘経のおくに血を以御誓請をあそハし、ちいろのそこにしつめ給ふ、かほといきとをりあさからぬ法王なれハ、讃岐坊も尤といたハしくそんせられ、ぎよくたいにちかづき奉り、くハいけいをす、がせ申へきとの事にて候、其年の十二月九日にあく左衛門信頼卿にかたらハれ、よしともむほんをおこせしも、偏に讃岐院の御りやうのゆへなり、弥怨念に仍て生なから天狗の姿に御身をやつし、御爪もはやし給ハず、御ぐしをもそらせ給ハす、扱もおそろしき御よそほひにて八年おハしまし、長寛二年八月廿六日に、御とし四十六にてしど、いふ所にて崩御あり、しろミねにて煙となし奉り、すてに五十年におよび候へ共、誰跡とふ人もなき所に、西行法師修行の次にて、比ハ仁安三年只今けんとうさむきに、松山の御べうへ尋求られ候処に、新院の御亡身かりにやしき老人と顕御道しるべ被成候、西行あさましきみさきをみ奉り、一首の歌に △よしやきみ、むかしの玉のことども、かゝらんのちなに、かわせん、とかやうに詠し給へハ、亡魂も嬉敷おほしめし、重てハきよくたいをあらハし、夜もすから舞楽をそうしなくさめ給ハふするとの御事にて候間、か様の折柄、相模坊にも諸天狗をともし、参内仕れとの御事なれハ、皆々そのふん心得候へく。

調伏曾我 二

ワキ、はこねの別当の坊也、別当の供して出ル、能力なり、はこわういざなひ、諷にた、先帰給へとてく手取足取いさな別当の坊にかへりけりく、ワキ、い

かに能力、へ御前に候ワキ、ごまのだんをかさり候へ。へ畏て候へあ、扱もく只今はこわう殿のふぜいをみて、我等こときの者迄も泪をなかし申て候、寔にせんだんハ二葉より匂ふと申が、さすがかわづ殿の御子にて候ぞ、親のかたきすけつねをうちたくおほし召、鎌倉殿のはこねまうでに、かのすけつねも定て御供にてあらうする、去ながら名こそ聞給ひて候へ、すけつねをしかくとみしり給ハす候、然所にはこわうも、常にすねうして人のいふ事も聞給ハす、学文をもめされず、わる狂ひはかりさしますが、今度何と分別めされたる哉覽、殊外おしだまつて別当をだまいて、かまくら殿の御参詣邂逅クマサカの事にて候間、御供の人くの名をおしへて給ハれと御申有て、すけつね一人をしらうするため、先鎌倉殿から御といあつて、あれこそくたう一らうと申され候へハ、はやはこわう殿すけつねかくとて、そのま、とびか、らうとせられた、別当その時おもひあたり、か様の所に長居ハせぬ物にて候、こちへ御出候へと御申被成た所へ、かの祐経はこわう殿をよびかけて、御父かわつ殿をあかさわ山のかりくらにて御果被成たるを、祐経がしわさと世上に申よし承候、それハ知ぬ人の申事にて候と、ことばにはなをさかせてまことしやかに申されけれハ、心ハたけくましませ共、さすがいとけなき身のかなしさハ、すけつねにだまされよハくとなり、あきれ果テ御座候處に、頼朝御下向被成候間、又はこわう殿、何とちんじても親のかたきハ祐経なり、もハや命ありてもせんなし、一太刀うらみて腹きらんと、だうじゆくの太刀を取て、かたきをおつかけ給ふ處に、だうじゆくたちおつめ、かゝるれうじ成事を被成候、先々御帰有て御思案候へとて、むかへてつれて帰り申され候を、別当聞給ひて、さやうにおほしめす事尤なり、さりとてハいたハしき事にて候間、いとけなくしてかたきをうち給ハん事おもひもよらぬ、左有ハ祐経をかたしろにつくり、護摩の壇上へすへをき、たちまち調伏して御本意を上げて進へし、しつまり給へはこわう殿と、御なだめありて護摩の壇を飾り候へと仰付られ候間、いそいてごまのたんをかさらハやと存る。こまの壇を飾すまいて、へいかに申上候、最前仰付られたる護摩壇をかさり申て候。へ中くの事。

小袖曾我 三

へ誰にてわたり候そ。へいやすけなり殿の御参にて候よ、又あれにわたり候ハ時宗殿にてハ御座候ハぬか。へ暫そ
れに御侍候へ、大かた様の仰にハ。祐業殿の御参ならハ申せ、時宗殿の御参ならハな申シそと、堅仰付られて候が、
何とすけなり殿の御参斗り申さうするか。へさらハそれに御侍候へ、そのよし申上候へし。へいかに申上候。へすけ
なり殿の御参にて候。へ心得申候。へ御参の通申て候へハ、こなたへ御参あれとの御事にて候、かうく御入候へ。
へいかにすけなり殿、大かた様の仰にハ、時宗殿の事を御申候は、すけなり殿迄の御勘当と仰候、其分御意得候へ。

△放下僧

四

わキノ供して出ル、太刀持テ出ル。【宋…わキノ供して出ル、太刀持て出】

へ御前に候。へ畏て候。へ心得申候。へ扱々外聞かたしけなや、御用心におゐてハ人を数多召つれさせられうする
御事なれ共、某一人と仰出されたるハ、我等を五十人百人にもむかわうするとおほしめすとみえた、是ハくわごんに
てハ御座ない、たのうだ人にとつてか、る者あらハ、五十人や百人ハ太刀も刀もいるまい、ねぢくびにしてくれう、
おそらくハ、樂屋をみて へ何と申ぞ、放下が参ると申か、そのよし窺申さう。へいかに申候、放下が参ると申候。へ
畏て候。へやいくその放下ハこなたへハいらぬと仰候ぞ、何とおもしろう狂ふと申か、爰にて笑、へ是ハみたひ事しや、
いやく某の意得を以て呼よせう、それならハいかに道をひろくとあけて、こなたへ通し候へく、笛の前に居ル、
諷ひに、人をあだにやおもふらんく、狂言たつて脇につくほうていふ。へいかに申候。へ最前の放下が参て候。脇名をとへといふ。へ畏て候。
へいかに申候、かたくハきやうかつたるなりにてこそ候へ、名をハ何と申候ぞ。シテ、そなたの名字は何と申候ぞ。へ是ハ
かくれもなき相模の国の住人、とねの信とし、口ふきまでハおりない、【宋…口ふきま】そなたの名をハ何と申候ぞ、シテ、ふうんりうすいと申候。へ
近比おもしろき名にて候へ、其よし申さう。へ名を尋て候へハ、ふうんりうすいと申候、諷ひに、しらすな物なのたまいそとい
ふ時。へこちが知ずハ、そちも知まひぞ。へ畏て候。へいかに申候、お舟へハ無用、くがちかうきたられ候へ、物を

お尋あらうするとの御事にて候、又諷に、切テさんだんとす。へあ、かなしや、シテ、禪坊の詞にて候。へ禪法のこととはならハ、とうゆいたい物でハないか、諷、おかしき人の心や。へそちがおかしからハこちもおかしいまでよ、脇、同舟せうすると申候へ。へ畏て候、右の通シテにいふ、諷に、たねと心やなりぬらん。へなをくかつこを打て、いかにもおもしろう御狂ひ候へ。

△吉野閑 五

わきなノリテ大コノ座ニ居ルト出ルナリ。

へつうわい、あとへつうわい。へいやかた、ハはやう出られたよ。へ中くか様の所へとう出ねハ、以来口がきかれぬと存知て罷出て候よ。へ先したにとうどゑさしめ。へ扱々しゆとたちハおそう出らるゝのふ。へされハおのくかつちうをたいして出らるゝかして、おそいかとおもふよ。へ時刻が移るに先出られたい事でハないか。へいやみな忝も吉野がうの酒宴^{サハ}の座敷へ、何者なれハぬれわらんづで出られたぞ。へ何と都道者成が酒宴のさしき共知す出た、都道者ならば判官殿の事をいざとふまいか。へ寔に取沙汰を知ぬ事ハあるまい、とハしめ。へのふく都にて判官殿の事ハ何と取さた致ぞ。へいやくさやうにとりさた致す共、中なをりハ有ましい、扱判官殿は此山をいか程にて御ひらきありたぞ、かた、ハおしりないか。へ十式騎とハ只十二人の事か。へそれハやすい事しや、いざさらば此ふんてなり共おつかけ討取申さう。へいやそなたハ殊外判官殿最^{サマ}賈^カしやよ。へあふそれハ尤さやうであらうず、むさと追かけだてして、せき矢にあたつて果てもいらさる事、只引こむまいか。へそれハ能分別しや、いざひつこまう。へさらハこちへわたしめ。

国栖 六

わき、イカニセウ、ヲイテカキタリテ候。何事もセウニ御まかせ候へト言テ舟ヲウツムケテ舟ニヨリカ、リテ入ト狂言イツル。

へやるまいそ、へいや爰迄ハみへたがみうしのふた、谷くがおほいほどに、随分能たづねい。へいや爰に老人がある、とおふ、いかかには成老人、きよみばらの天王ハどちへおりやたぞ。へ老にほれてむさとしたる事をいふ、きよみばらの天王ハどちへおりやたぞやい。へそれも尤しや、どこをどことたつねふやうが有まい程に、いざさらハ

もどろう。へ一段よかるふ。へや、先またしめ。へ何事しや。へあの舟がうつむけて有が不審な、あれをあをのけてみよう。へおふ、尤しや程に、あをのけてみさしめ。へのおふ、その舟ハ何とてうつむけておかしまつたそ。たとへばす舟なり共、その下が不審な程に、そこのかしめ、舟のしたをみよう。へあ、暫、れうじな事をいハしますな、おいての者ハもどるぞく、長居したらハひきめをあふ事があらう、いさのこふただのけく。

守矢 七

太子釣舟

狂言国栖などのごとく。

へやるまいそく、正敷爰元迄みえたが、此木のあたりにてみうしのふた、ふしき成事しや。

脇出テ

○太子ハうち取であるかといふ時。へさん候此木の本にてみうしのふて候。御馬ハ天にあかりたるとみへ申て候。へいそ

いてそまをめされうするにて候。

△籠太鼓

八 間、狂言榜脇指サス

ワキとつれだち、太刀持テ出、太鼓の座ニあてワキ呼出ヌ時、太刀を下ニ置出る。

へ御前に候。へ畏て候。○籠と脇正面ノ間少先へ出テしやべる。へあ、清次ハ、やうもないはらあしだてをして、なんなふ敵を討て候へ共、わが身ハ籠舎をして、我等迄に番をさせてくらうをかけらるゝ事しや、去ながら日比恋をしたる間、か様の折節馳走を致さいでハ叶ぬ事しやほとに、かまいて何事成共用の事があらハいハしませ、随分はしりまはらうするぞ、清次くのお清次、南無三寶清次が籠をやぶつてぬけた、扱々にかくしい事をした事哉、よいとハ仰られまい、某の迷惑に成ハぢじやうの事じや、何と致ひてよからうぞ、いやく是ハ其儘ハをかれまい、たとへ某の迷惑に及ふ共、申あげいでハ叶ぬ、是非に及ハぬ、いそひて申あげう。へいかに申候、ぬけて御座る。へいやいつの間に哉覧、ぬけて御座る。へその事にて御座有、随分番をかたく致やうに仕りたるが、いつの間に哉覧目がより相をいたいて御座るか、その間に清次が籠をやぶつてぬけて御座る。へあ、是ハ迷惑にて候。へいや子ハ御座ない。へいや御

ざらぬ。へ中へ妻ハ御座る。へ畏て候。へあら心安や、すでに迷惑に及ふかと存知た、いそひで清次が妻をつれて参り御機嫌をなをさう。へいかに此内に清次がつまのわたり候か、松浦殿より御参あれとの御事にて候。へいやそなたハさきぐりな事をおしやる、さやうの事でハおりない、なに哉覽物をお尋あらうするとの御事にて候、いそひて御参り候へ。へ清次がつまをつれて参りて候、諷ひに、今の女をひきたて、といふ時、いかにたれがある。へ御前に候。へ畏て候。○報ひの程ぞむさんなりく、太刀ぬき太刀を持。へがつきめ、やいお主がつまの清次こそ油断してにがいたり、汝ハ女なり共油断はすまいぞ、かつきめ。太刀ぬき太刀ぬきかけ下二入へ御前にへ畏て候。太刀ぬき太刀ぬきつりくへあ、とをかうかやうに仰付られたらハ、太鼓を打て一時番をいたさう程に、清次をもにかすまい物を、にかいて無念な、さりながら太鼓をつて一時ハやすい事しや、先たいこをうとふ、などんくくくくく、どんぐつ、とんぐつ、どん五つ、とん八つ、とん九つ、十あとを打すこした、今度のたりにいたさう。太刀ぬき太刀ぬき下入へあ、かしましや籠中の女がくどき事を申に耳がすやく。へいや籠の女が狂気する、いそひて此由申さう。へいかに申候、へ中へ○籠ノ女が狂気仕候の事、へやい松浦殿の是へ御出なさる、ぞ、籠のあたりを立のき候へく。
太鼓ヲ籠の口ハ正面、太鼓、ワキ正面也、戸のわきに手のとく程につるなり、扱太鼓を打テその下に正面向テとうどある、太刀にてもわき指にてもする、二やうに有。

蟬丸 九

ワキ、延喜之臣下、中入、諷ひ、琵琶をいたきてつゝをもち、ふししづミてぞなき給ふく、是が中入、爰にてなのり候、狂言わらやをしつらいてから出申て、一せいにてさかがミ出で。へ是ハ此あたりに住はくかの三位と申者にて候、去程に此あふ坂山に上つかたの御人を捨申されたるよし聞及びて候間、いかやう成御方ぞみてまいらハやと存る。へされハこそ御座候、扱々いたハしき御事にて候物哉、能々み申せハ是ハ寔にたゞならぬ御方とみへた、あのことくにして御座あらハ雨露にうたれさせ給ひて御迷惑なされうする、あまりに御いたハしく候間、わらやをしつらいて入申さハやと存る、つくり物もちて出。へいかに申上候、御あ

りさまをみ申てあまりに御いたハしく存る程に、三位がわらやをそとしつらいて参らせ候間、此内に御座被成候へや、爰にて作り物のうちへ入ル。へ又頓て御見舞申さうする、そのうちにも御用の事候は、はくかの三位と御尋候へ、随分御みやつかへ申さうするにて候、頓て参らうするぞや。つくり物あしかりの通、わらにてしつらい申候、置所太夫次第。

△富士太鼓 拾

わきの供して出、太こ打ノきわ入

へ御前に候。へ畏て候。へ誰にてわたり候ぞ。へ扱ハ富士がゆかりの人にてわたり候か。扱かたぐハ富士がためにハなにて候ぞ、といふ事も有。さあらハそれにしハらく御待候へ、そのよし申さう。へいかに申候、富士がゆかりと申て尋て来りて候。へ畏て候。へいかに最前の人^ののわたり候か。へあれへ御参あれ、御對面あらうするとの御事にて候。

△善知鳥 拾壹

上か、りハ秋と言、下ニハ春と言。

へそとのはまの者のお尋ハ、いかやう成御用にて候ぞ。へ何と承候ぞ、去年の秋の比^年まかりたる獵師屋^をおしへ申せとの御事にて候か、そのれうしの屋ハあれ成たかまかりの内にて候、そのれうしに付物語の候、此所に善知鳥と申鳥の候が、人にしらせぬやうに濱に巢をかけ、殊にはま風あらく吹て、すの所へまさをふきかけ、所もみえ申さす候を、親鳥うへにてうたふとなき候へハ、子ハしたにてやすかたとこたへ申ス、その親のまねをかのれうし仕り候へハ、子ハおやと心得、やすかたとこたへ申ス、それをするべにさかし出し子^をとり申候、なんほうれうしのなかにも奇特成事の候ぞ、あれ成たかまかりの内へ御越有て、れうしの屋と御尋あらうするにて候。へ御用の事あらハ、重て承らうするにて候。へ心得申候。

△百萬 拾二

へ門前の者のお尋ハ、いかやう成御用にて候ぞ。へさん候、此邊ハいつも様々おもしろき事御座有とハ申せ共、今

程は何にてもおもしろき事ハ御座なく候、去ながら頃ハ大念仏にて御座候が、念仏をハしめ候へハ、女物狂ひ出おもしろう狂ひ申候が、是を呼出し御目につけ申さうするか。へさらハ念仏をハじめ呼出しみせ申さうする間かう御通り候へ、へ南無尺迦むにんむく、地へとるへ南無しやかしやかく、地へとるへさふさみさあくくく。へ蜂がさいた。へ是ハ尤の事にて候、さらハおんどを御取候へ。

△自然居士 拾三

わき出、ナノリ座ニ入ト出ル、上かゝりハ、わき後に入ル【わき出、ナノリ座ニ入ト出ル、上かゝりハわき後に入ル也】

へかやうに候者ハ、東山うんこじの門前に住居する者にて候、うんこじざうゑいのために、自然居士の七日の説法を御のべなされ候、今日まんさんにて候間、皆々聴聞に参られ候へ、そのふん心得候へく。へはや申うちにちやうじゆも群集仕候間、居士に此よしを申、説法をのべさせ申さハやと存る。へいかに居士へ申候、ちやうじゆも悉ク群集仕候間、いそひて説法を御のへあらうするにて候。へ中くまんさんと相觸申て候。腰かけを持て出、こしをかけさせ。へちやうじゆも群集仕候間、いそひて説法を御のべ候へ、諷の内に子ヲむかいにあて。へや、あらいたひけや、是成おさなひの諷誦をあげられ候、こなたへわたり候へ、へいかに居士へ申候、是成おさなひの諷誦をあげられ候、又此小袖ハ布施物にて御座候、諷誦をわたし、きる物大夫の前二置、かたさき大夫の左の方、すそ右、ありを前の方にをくなり、諷ひ過テ、脇つれ子ヲひきたつる時、へやるまいそく。へやうが有共やるまいぞ。へやうがあらばつれてゆかう迄。へ扱ハ只今のおさなき人ハ、子細あるとみえた。へいかに居士へ申候、只今のおさなき者を、あらけなきおのこの二人来り、ひつたてつて行候程に、やるましきと申て候へハ、用があると申候程にやりて候が、居士ハなにとおほしめされ候ぞ。へいや何共某の推量にハ及ず候。へ左様の者ならハ大津松本の邊へ参らうする間、某おつかけとめ申さう。へさやうに候は、七日の説法がむにならうするにて候。小袖をとりありをかみ袖を下へしてかたを大夫の右の方へうしろからきする也、しやうぎを持はいる、上掛りハ太鼓の座二あて、やるまいそく言てたつ。

東岸居士 拾四

わキ、ナノリテ清水へ参らふと言時、そのまゝ、出テはやくよひかけたるかよし。【わキ、なのりて清水へ参らうと云時】

へ是ハ清水へ参る者にて候、急て参らハやと存る、是成御方ハ何所へ何方へ御出候ぞ。へ扱ハ左様にて候か、惣して都ハ人の集りにて候間、見事聞事おほく候が、今程ハ餘おもしろき事ハなく候、去ながら爰に自然居士の御弟子に、東岸居士と申かつしきの御座候が、四条五条の橋のすゝめを被成候、すゝめに御入候へハ、おもしろう御狂ひ候間、暫是に御待あつて、それを御覧候へ。へ我等も是に待申さうするにて候。へなにとてかつこを御打なさるゝを御存知候ぞ。へたとへ御存知有ても、御所望あるに合点被成たるが奇特にて候、一段と御機嫌が能候間、何にても御所望あらうするにて候。へ尤にて候、今日程の御機嫌ハなく候、なににても御所望被成候へ。

△花月 拾五

へ門前の者のお尋ハ、如何様成御用にて候ぞ。へさん候、都ハいつも人の集りにて見事聞事おほく候が、今程おもしろき事ハなく候、去ながら爰に花月と申てかつしきの候が、いつも此所へ御出被成、おもしろき小うたを御うたひ候が、呼出シ御目にかかけ申さうするか。へさあらハかう御通候へ。へいかに花月へ申候、今日ハなにとておそく御出候ぞ、とう／＼出られ候へや、○へ中／＼天下にかくれもなきお名で御座る、さあらハいつものことく小歌をうたひ申さうする間、ともにうとふて御慰候へや。○大夫右ノ手ヲかたへかけて、こしかたよりとうたひ出ス、あと地。へいやあの花に目がある、

天下にかくれもなき花月トわれヲ申サリト云時、大夫ノ右ノ方ヨリ出テ

アレ成蔭が花ヲミ散シ候

目でハなふて鶯が花ふみちらし候、へいかに花月へ申候 幸御持候弓にて一矢あそバされ候へや、是合笛吹ノさきに入ルへ寔に是ハ殺生かいにて候、ちか比あやまつて候、さあらハぢしゆのくせまひをうたふて御慰候へや、久敷父子に相うれしや候 へやあ／＼そこつな出家が子を持物か、へあ、俗にてうしなハせられたお子じやと仰らるゝな、寔に仰らるれハ尤で御座る、おもしろしが瓜を弐つにわつたごとくに似させられた、扱只今ともなひ御帰国あらうするとの御事にて候か。へいかに花月へ申候、寔に父ごに久々にて御逢被成候事、是と申も観世音の御引あハせと存知候、又此中の名残

にかつこを打て御みせ候へて、其後父ごと御ともなひ被成何方へも御下りあらうするにて候、へいかに父ごへ申候、誠に花月殿に是にて御相被成候事、なんほう目出度御事にて候、花月殿へかつこを所望仕て候間、それを御覧じ何方へも御ともなひあらうするにて候。

春栄 拾六

わキノ供して出ル。太刀持テ【わキノ供して出ル、太刀モチ】

へ御前に候。へ畏て候。へ案内とハたれにてわたり候ぞ、へ中へ是にて候、へ春栄殿の御事ハたかはし別ていたハリ申され候間、そのよし窺申さうする、それに暫御待候へ、へいかに申上候、春栄殿のゆかりの人と仰られ、御對面ありたきよしおほせられ候。へ中へ御大法の事にて御座候へ共、春栄殿の御事ハ、別て御いたハリにて候間、扨窺申て候。へ畏て候。へ最前の人のおたり候か、只今の通うか、ひ申て候へハ、囚人の御ゆかりに對面ハ堅禁制にて候へ共、春栄殿の御事をハ、たかハし別て御いたハリにて候間、御對面あらうすると仰られ候、又大法にて御座候間、太刀かたな預り申さうするにて候。へいそひて窺御申あらうするにて候。へ是に候。へさあらハ請取申さう、其方のも渡され候へ。へ太刀かたなをあづかり申て候。へ畏て候。へ最前の人のおたり候か。へ御對面あらうする間、こなたへ御通候へ。へ御前に候。へ畏て候。へ扨もへめてたい御事哉、か様に御命を御たすかり候事、なんほうめてたき事にて候、五百八拾年何事も御座あるまじい目出度御事にて候。

△船弁慶 拾七

脇指さ、つに出ル。【脇指さ、つに出ル】

へ案内とハたれにてわたり候ぞ、いや武藏殿にて候、扨只今ハ何のための御下向にて御座候ぞ、へ近比冥加もなき仕合にて候へ共、御宿を申あけうするにて候。へ御座舟の御事ハ、随分足のはやき舟を持て候間、御意次第に仰付ら

れ候へ 中人有テ へ 扱々近比哀成御事にて候、此度君の落人となり給ひ西国へ御下向候へハ、しつかはいづく迄も御供とて、是迄御下り候へ共、君のおほしめし候ハ、世上のじんかうをいか、とおほしめし、是に御と、め被成候間、互の名残をおしミ、しうたんの泪を御なかし候事、なんぼう哀に存る、先武蔵殿へ御見廻申さうするにて候。へいかに武蔵殿御座候か、宿のていしゆにて候、御見舞に参て候。へ 扱々閑の何所迄も御供とおもひ、是迄御下り被成候に、此度の御事なれハ、君も世上の人目を如何とおほし召、御と、め被成候事、寔に互の御心中をさつし参らせ、我等ごとき迄も哀に存る事にて候。へ 中く用意仕置申候間、何時にても御用次第仰付られ候へ。へ 畏て候。 脇指さス、つれてお舟を出しけりと言時、諷ノ文句にあハセテ舟ヲナラス。へ 皆々お舟にめされ候へ。へ いかん武蔵殿へ申候。へ 今日ハ君の御首途に、日本一の天気にて満足申て候、かやうの天気にお舟を出し申事、君の御仕合がみえ申て候、又御座舟へハ能若キ者共をすぐつてのせ申候、其上某がかんどりに参るうへハ、海上の義ハ少も御氣遣有間敷候。へ ちと武蔵殿へ訴訟申度事の候、へ 別の事にてハ御座ないが、君の御上洛ハ只今の御事のやうに存候間、さやうの折節ハ、是ハ西国迄の海のおもてを集き人に仰付あれいかしとの望ミにて候が、但何とおほしめし候ぞ。へ さやうにか様の折柄ハ御合点がまいつても、寔の時ハ必ようわすれさせらる、物にて候程に、御失念の御座なきやうに頼申候。へ 是ハ近比かたしけなき御事にて候、扱ハ日本一の御機嫌に申合せ満足仕て候、此上ハ随分精を出し申さうするにて候。へ 悪いくく、やらふしきや、あのむこ山のうへ、あのやう成雲がうれハ必風がおつる物じや、皆々精を出し候へ。へ 何事にて候ぞ。へ その事で御座る、俄にけしきがかわつて候、去ながら某のかんとりに参るうへハ、少も御氣遣ハ有間敷候。へ 悪いくく、あらふしきや殊外舟がしたるふなつた、さればこそ風がおちてきた、へ ありやく、波よく、こせく、しい。へ あ、こ、な人ハ舟中で今のやうな事を仰らる、物か。へ 扱ハ舟中不案内の人にて御座有か、さやうで御座有ならハ尤にて候、只かんとりと武蔵殿とに御まかせ候へ。 諷ひ、波にうかみてみへたるぞや、太鼓打出すと下にゐる。へ 畏て候、お

舟をこぎのけといふ時、式つ三つこぎ、下にある、舟を持てはいる。

△山姥 拾八

へ堺川の者のお尋ハ、如何様成御用にて候そ。へさん候、是令善光寺の道数多御座候、上道・下道・あげろごへと申ス、なかにも此あげろこへハ如来のふみわけ給へる道にて、こしんのみだゆいしんの浄土にたとへをかれたる道にて候により、余の道を細々御参ありたるよりも、あげろこへをひとたび御参あれハ、如来の御内證に御叶ひあると申スガ、是ハよの道合けんなんさがしき道にて候、み申せハ御上らう衆とみへ申て候が、乗物なとハ中へ叶ハぬ道にて候。へさあらハ窺御申候へ。へお、尤御不知案内に御座あらうする間、お案内者申さうする、いそひて御たて候へ。へさあらハこなたへ御入候へ、御覽せられ候ごとく、我等の申したるよりけんなんさかしき道にてハ候ハぬか。へかやうに候程に、始より乗物ハかなふましいと申て候。へあらふしぎや、何と哉覽くらう成て候。へいやかやうにくらうならふ事でハ御座らぬが、ふしき成事にて候。へいやくともりもなき所にて候。へいやお宿を参らせうと申ス、不思議成事にて候。へされハこそ夜があけた、扱もふしき成事哉、さきにくれまい時分と存知て候が、みれハばつくん日がたかい、惣して爰元でかやうの事にあふた事がないが、ふしぎな事じや。へいかに申候、又夜が明て御座候。へ我等も最前くれましき日にてあると存知たが、俄にくらう成て日が暮て候程に、是程ならハ堺川にとめ申さうするを、是迄御供申参り、迷惑仕て候に、又夜が明て満足申候。へいやく山中ちかい所に住申せ共、かやうの事に相た事ハ、今がはじめにて候。へ是ハおもひもよらぬ事をお尋にて候、我等も此所にハ住居仕候へ共、さやうの事委ハ存せす候、去ながら人のさうたんめされたるをきいた事が御座有程に、御慰に物語申さうするにて候。へ先人の申されたるハ、山姥にハ山中のさうかまへにたてたる木戸が成と申ス。へその子細ハ、先一たん門をたて、事ハたてたれ共、其後修理をもいたさいてをく程に、とびらもなにもくさつて後に柱ばかりのこり、それに苔がはへ、つたかつ

らなとがはへついで、それがかしらとなり、目ができ、鼻が出来、口・耳・手・足が付て、次第にしゃうねがいでき、是がしゃうじんの山姥になると申候。へいや／＼さやうにな仰られそ、山姥ハ山にすむ木戸と申上ハ、是がいぢやうなり申さうするにて候。へきど鬼女。へあ、扱ハ某の申たるハすぢなき事にて候な、都の御方に参りあい、本説と承、満足仕て候、又何哉覧山姥に成と申て御ざるが、わすれて御座る、今おもひ出ひて候、山姥にハどんぐりがなると申。へ中／＼いハれこそ御座あれ、山の岑にとんくりの木が御座れハ、それがじゆくいたひて、谷へひたころびにころひおち、そのうちにちりあくたがとりついで次第に大きうなり、則そのどんぐりが目となり、口・耳・手・足が付て、すさまじい姿となり、是が山姥になると申ス。へいや、さあるに仍て、人間の目の大なハ、とんくり目と申上ハ、是が一じやうなり申さうするにて候。へ寔に仰るれハ尤で御座有、とんくりのふんにてハ山姥になりますまい、又何哉覧山姥になると申されて御座ある。へいや、今おもひ出して候、正真の山姥にハ、ところが成と申ス。へそのいハれハ、惣して明暮雨がふりますれハ、山なとがくづる事が御座有、そのくづれくちに、かのところがちよつとあらハれて、惣してところにハ髭と申物が御座有が、そのひげが雨露にうたれてひたしやれにしやれ、しらかのこくとくに成て、目ができ、鼻がてき、口・耳・手・足が付て、是が正真の山姥になると申ス。へそのやうにあれもなるまい、是もなるまいと仰られ候へハ、一じやうならふする者ハ御座なく候、先あれに御座候御方の名をハなにと申候ぞ。へそれにつきおもひ出したる事の候、最前女の申分事ハに、山姥の一ふしをうたひ御申あらハ、その時頭れうつり舞をまハふすると哉覧申て候程に、かの一ふしをうたひ御申あり、正真の山姥を御覽被成、我等にもみせて給り候へ。へ畏て候。

△西行桜 拾九

間、能力、口アケ、脇ノ供ヲシテ出、脇、座ニナルト出テ名乗。

へ是ハ西行の庵室に仕へ申能力にて候、去程に庵室にかくれもなき花の御座候により、毎年春にもなれハかなたこなたハ花見の輩おほく貴賤群集をなし申候が、何とおほしめし候哉覽、此春ハ花見禁制と仰出され候間、皆々そのふん意得候へく。へ案内とハたれにてわたり候ぞ。へ尤みせ申度候へ共、何とおほし召候哉覽、此春ハ花見禁制と仰出され候間、御機嫌を以申上候へし、暫御待候へ。調に、くわじつのおり成べし、あらおもしろや。へ一段の御機嫌じや。へいかに申候、都合と申て若キ人々の御庭の花をみ申度由申され候。へ中くの事、そのよし申て候へ共、遙々参て候間、ひらにみせてくれよと申され候、そと御みせあれかしと存候。へ畏て候。へ御機嫌を以申て候へハ、みせ申せとの御事にて候、かうく御通候へ。

△黒塚 廿

へ扱もく奇特成事哉、此みちのくの人倫たえたる所に住人の、慈悲心のふかきハいかに、たとへ夜寒にあれハとて、女の身として夜中に山へ分入、薪を取て参り、火に焼あて申さんとの志は、去共奇特成事哉。旅ハ情、人ハ心と申もおとしたりの虫摺わやとにして伝へ候が、今夜のあるしのやうな情のふかい人ハなく候、され共言にふしき成事がある、山へ参るとて立もどり、あじやりに申ス事ハ、わが闇の内を御覧候など申たるが、あの志にハ似合ぬ事を申タ。へいかに申候、今夜のあるしハきどくにお宿を申されて候、殊更夜中に山へ分入、薪をとりて参り、火にたきあて申さうするとの心指ハ、女の身としてハ奇特に存るが、何とおほしめし候ぞ。へ去ながら余の女にかハリ、今夜のあるしハなにと哉覽物すこいやうに覚えて御座有程に、心を付てみ申て候へハ、山へ参様に立帰り、わが寢屋の内を御覧せらるゝなど申たが、人にこそよれ、あじやりなとに申さうする事にてハないと存るが、何とおほしめし候ぞ。へ扱ハ左様におほしめさハ、我等の存るも同じ事で御座る、左有ハあるしの闇をみて参らうするにて候。へあ、いや、あじやりこそハお約束被成たれ、我等のみ申たる分ハ苦しい事で御座るがの。へ畏て候、さやうにおほしめさハ、ともかくも御意次第にて候。へ

畏て候、さらハふせらう。へあ、心か、りや、ねられもせぬぞ。へあ、いや、どこへも参らぬ、ふせりまする。へのふ嬉しや、先おそばをハ忍び出た、さとひおかたしや所でだしぬく事がならぬ、惣して某のくせとして、人のなみそいふ物ハみたし、みよといふ物ハみたふもおりないが、今夜のあるじがなみそと申たに仍、みたうて身の毛がよだつてぞんとする、みたといふて後にしからせられうとま、よ、みたうてならぬ程に急でみよう。ころぶ へのふかなしや、おそろしや、今夜のあるしハ鬼じや、かくいたるこそ道理なれ、いそきあじやりへ申さう。へ申くみて御座る。へいや主の閨をなみそと仰られたれ共、餘に不審に存知て、忍び出てみて御座あれハ、しこつ・はつこつハつもありもなし、なま／＼としたしがいをのきとひとしくつまかさねて置、鞠程なひかり物がいくつも御座る、菟角人間でハ御座るまい、是に御座あつたらハかの女が命をとろふする間、急て此宿を御たち候へ。へ尤で御座る、先閨を御らうじられて、いそひて御たち候へ。へのふ／＼こハや、先私ハさきへにげう。

付 記

西村本『間之本』の翻刻を許可いただいた、筑波大学図書館に心より感謝致します。また、梶山女学園大学より、平成五年度の学園研究費助成を頂きました。本稿はその成果の一部となります。なお、パソコンへのデータ入力には、日本福祉大学社会福祉学部学生生の平沢真哉君の協力を得ました。記して感謝申し上げます。